

資本論第二巻 第2篇 資本の回転  
第9章 前貸資本の総回転。回転の循環

269.1 「われわれが見たように、…」

- ・資本の循環をバラバラの事象としてではなく周期的、連続的な過程としてとらえること。資本が周期的に出発点と同じ形態にもどってくる循環運動。それを“資本の回転”と呼ぶ。
- ・この資本の回転の期間（時間）は、生産期間と流通期間の合計である。資本家が価値増殖した資本を再び受け取るまで、資本を前貸ししなくてはならない期間である。
- ・個別の資本にとって、この資本の回転の速度（効率）は極めて重要な課題となる。

生産資本：固定的構成部分、不変資本と可変資本、流動的構成部分で構成されている。

269.8～「(1) …しかし、(2) 量的区別のみではなく、質的区別が現れる。」

- ・建物や設備、機械といった生産手段の一部は幾度にわたる生産期間の後、初めて完全に消耗される。その平均的な消耗期間に応じてそれらの生産手段は自らの価値の一部分だけを生産物への価値へ移転する。
- ・例えば、機械が20回の生産期間にわたって用いられるならば、その機械は20回の期間にわたり毎回自分の価値の1/20を生産物に移転する。この機械の価値が、すでに部分的に流通へと入って行く一方で、この機械はその現物形態としては生産領域に固定されたまま残る。
- ・この属性を伴った、不変資本の構成部分は固定資本と呼ばれる。固定資本と対を成すのが流動資本である。流動資本は、1回の生産期間において使い果たされ、その現物が消え去る資本の構成部分である。例えば、原料、補助材料、電力などのエネルギー。
- ・資本家にとって固定資本と流動資本の区別は、素材的な意味合いではない、動産と不動産の違いでもない、可動的なものとは不可動的なものでもない。剰余価値獲得上、経理（経営）上の区別にすぎない。
- ・標準的な生産条件下では、流動資本の価値は1回転の後には補填され、すぐにまた次なる生産期間へと前貸しされなくてはならない。固定資本の価値は幾度も生産期間が経過するうちに初めて生産物へ移転され

る。従って、それは 1 回転の後に部分的に戻ってくるだけである。この還流部分はすぐには必要とされず、新しい機械、設備を調達する場合に初めて必要になる。その際、固定資本の総額はもちろん一度に前貸しされなくてはならない。従って、その時まで固定資本の還流部分はさしあたり、準備金（減価償却費）の形で蓄積されていく。

## 第 10 章 固定資本と流通資本とにかんする諸理論。

### 重農学派とアダム・スミス

278.1 「ケネーにあつては、固定資本と流動資本との区別は、原前貸（固定資本）と年前貸（流動資本）として現れる。彼がこの区別を生産資本すなわち直接的生産過程に合体された資本の内部における区別として述べているのは正しい」とマルクスは評価する。

農業生産における資本の回転時間単位は 1 年であり、従って年前貸となる。

### 重農主義とは（ウィキペディア）

重農主義（じゅうのうしゅぎ、physiocratie、英：physiocracy）とは、18 世紀後半、フランスのフランソワ・ケネーなどによって主張された経済思想およびそれに基づく政策である。

重農主義は、18 世紀後半のフランスで、ルイ 15 世の治世の下での戦争と王権による贅沢によって、経済・社会が疲弊した頃に発生した<sup>[3]</sup>。富の唯一の源泉は農業であるとの立場から、農業生産を重視する理論であり、重商主義を批判し、レッセフェール（自由放任）を主張した。この考え方はアダム・スミスの思想に大きな影響を与えた。

### 重農主義的説明（ウィキペディア）

しかし、商人は富の源泉ではない。重農主義者は「工業と商業のどちらも富を生まない。」と信じていた<sup>[2]</sup>。もっともらしい説明は、「重農主義者は、フランス経済の実際の状況に照らして彼らの理論を発展させた。」というものである。フランスは、土地所有者が人口の 6~8%を構成し、土地の 50%を所有する絶対君主制であった<sup>[3]</sup>。農業は国の富の 80%を占め<sup>[2]</sup>、人口の土地を所有しない部分は、「実質的に、すべての所得を食糧の必要によって消費されてしまうような、本当にわずかなものを生産する、自給自足の農業を行っている。」<sup>[3]</sup> また輸出は主に、ワインのような農業ベースの製品から成っている<sup>[3]</sup>。フランス経済における農業の大規模な影響を考えると、彼らは王の利点に使用するために

経済モデルを開発した可能性の方が高い。

重農主義者は、反重商主義運動の先頭に立った。ケネーの理論に代わる選択肢としての工業と国際貿易に反対する彼の主張は、二点ある。第一に、工業は富の増加を生まないため、農業から工業へ労働力を向け直すことは、国の全体の富を減少させるだろう。さらに、人口は利用可能な土地と食糧供給を満たすまで膨張するため、土地の使用が食糧を生産しないのであれば、人口は減少しなければならない。第二に、重商主義者の基本的前提は、富を得るためには、国は輸入する以上に輸出しなければならないということだが、しかしそれは、国内消費の需要よりも多くの交換可能な資源を持つことを仮定している。フランスは完成品や半完成品を生産することのできる植民地を持たなかった。イギリス（例えばインドのような）やオランダ（例えば北アメリカ、アフリカ、南アメリカのような）のように。フランスの主な植民地的存在は、カリブ海、北アメリカ南部、そして東南アジアであったが、それらはフランスのように、農業ベースの経済だった。フランスが輸出のために過剰に持っていた唯一の商品は食糧であったため、工業生産を基盤とする国際貿易がより多くの富を生むことはなかっただろう。

しかし、ケネーは反工業ではなかった。フランスが強力な工業市場を育成するのに良い立場にはないという自分の評価に対して、彼が現実的ただけだった。彼は、職人や工場がフランスに来るのは、彼らの商品に対する国内市場の大きさの比率に限るだろうと主張した<sup>[4]</sup>。「国は、原料の地域的利用可能性と適切な労働力が、海外競争上のコスト優位性を持つことができる範囲においてのみ、国は工業生産に集中すべきである。」とケネーは信じていた<sup>[4]</sup>。その総計を超えるいかなるものも、貿易を通じて購入する必要があるのである。

### **経済表とは（ウィキペディア）**

経済表（けいざいひょう）は、フランソワ・ケネーが1758年に著した経済モデルである。重農主義経済理論の基礎となった<sup>[1]</sup>。カール・マルクスからは「実に天才的な、疑いもなく最も天才的な着想」と称賛されている。

ケネーは、商業と工業は富の源泉ではないと考えており、その代わりに彼の著書『経済表』(*Tableau économique*, 1758)の中で、地代、賃金、購買の形をとって経済を流通する農業余剰が経済の原動力だと示した。ケネーによれば、第一に、規制は社会階級全体の所得の流れを妨げるため、経済発展を阻害する。第二に、地主などの非生産階級の贅沢な生活習慣は所得の流れを歪めるため、彼らの繁栄に有利となる、農民などの生産階級への課税を減らさなければならない。

## モデルについて (ウィキペディア)

ケネーが作成したモデルは、3つの経済主体で構成されている。「所有」階級は、地主のみで構成されている。「生産」階級はすべての農業労働者で構成されている。「不産」階級は職人や商人から構成されている。3つの階級間の生産物と（または）現金の流れは所有階級から始まるが、これは彼らが土地を所有し、他のいずれの階級からも購入するからである。

280.1 アダム・スミスの示す唯一の進歩は、これらの範疇の一般化である。それは彼にあって、もはや資本の一特殊形態である借地農業資本家に関するものではなく、生産資本の各形態に関するものであると述べ、アダム・スミスにあっては、年前貸は流通資本に、原前貸は固定資本に転化されると、借地農業者資本に限らず、生産資本の各形態に関係するとしたこと。

マルクスのスミスに対する皮肉、指摘、混乱のもと。

280.10 アダム・スミス「資本がその使用者に収入または利潤をもたらすように使用されうる二つの異なる仕方がある」この二つとは、固定資本と流動資本をさしている。

281. 後 2「後になって、かように投下された資本が、固定資本と流動資本とに分かれることを、われわれに言っている。

281. 後 1「要するに、この仕方での資本の投下は、資本を固定資本にも流動資本にもなしえないのである」最早この区別は意味をなさいということ。

282.12 アダム・スミスはさらに言う「承認の財貨は……かような資本はきわめて適切に流動資本と呼ばれうる」

283.1 この規定に対しマルクスは、「私が流通資本と呼ぼうとするもの」とし、

283.8「資本価値の流通の内部で、そのつぎつぎにとる諸形態を通して行われる循環において、資本価値が生産資本の形態にある間に発生する形態上の区別と混同している」と批判している。

あわせて 283. 後 6「他方における固定資本と流動資本との、かような根本的混同の結果を、われわれはなお後に見るであろう」

285.7 薄弱と混乱は、ただちに次の点に現れる。機械製造業者にとっては、機械は商品資本として流通する生産物であり、したがってアダム・スミスの言葉では「手放され、持ち主を換え、さらに流通する、」生産物である。かような混乱もまた、スミスが生産資本の種々の要素の流通の仕方の差異から生ずる固

定資本と流動資本との区別を、同じ資本が生産過程の内部では生産資本として機能し、これに反して流通部面の内部では流通資本すなわち商品資本または貨幣資本として機能する限りにおいて通過する形態上の区別と、混同していることから生じる。

流通過程にある「機械」は機械製造業者にとってはあくまでも商品であり、そしてそれを購入した工場主にとっては、生産手段の購入であり、生産資本となること。流動資本と固定資本、生産資本と流通資本とがごちゃごちゃになっている。

290. 後 5 アダム・スミスの主張では、生産手段の一部（本来の労働手段）は、その現物形態を変えることなく、ただ漸次的にのみ消耗されつつ労働過程で役立つが（スミスは誤って、「その持主に利潤をもたらす」と言っている）